復活節第四主日　2017.5.7

# 羊の囲いのたとえ

ヨハネ 10 章 1-10 節

10:1 「はっきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。
10:2 門から入る者が羊飼いである。
10:3 門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。
10:4 自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、ついて行く。
10:5 しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」
10:6 イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。
10:7 イエスはまた言われた。「はっきり言っておく。わたしは羊の門である。
10:8 わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。
10:9 わたしは門である。わたしを通って入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。
10:10 盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。

説教

解説によると、羊飼いたちは「羊の囲い」を共有していたそうです。当時は羊を遊牧して飼育していて昼間は羊は囲いの外に出て草を食べて夜になると羊の安全のために囲いに入ったそうです。毎日同じ囲いに戻るのではなく、

こっちの囲いからあっちの囲いへと羊を移動しながら飼育していたのでしょう。遊牧ですので、同じところにずっといたら食べる草に不自由してしまいます。だから囲いの中にはＡさんの羊もＢさんの羊も、メリーさんの羊もいるわけです。羊は羊飼いの声を聴き分けて昼になると門から出て草をはみにいくわけです。囲いには門があり、そこには門番がいます。門からはいるのは羊飼いで、柵を乗り越えてくるのは盗人、強盗だとイエスはいいます。なんか当たり前の話のように聞こえます。
これを聞いたファリサイ派の人々はわからなかった、とあります。これだけではわたしたちもファリサイ派とおなじでわかりません。きょうの福音は３月26日に聴いた福音（ヨハネ９章）からの続きの個所です。
直前のヨハネ９章はどんな出来事があったかというと、そこでは「盲人のいやし」の奇跡が記されています。イエスによって目が見えるようになった彼は、ファリサイ派の人々の脅迫「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」（ヨハネ9:34）という脅しに屈せず、「あの方は預言者です」と信仰告白し、まことの羊飼いであるイエスの声に聞き従った、そのかわりに追放（ユダヤ社会からに追い出される）というのが大まかなあらすじです。
「囲い」というのはたとえです。荒野で叫ぶ者は洗礼者ヨハネでした。彼はもともと囲いの外から叫んでいました。かたやイエスは「囲い＝ユダヤ人社会」の中でのびのびと福音を伝えていたようです。（人はイエスを大酒のみのおお飯食らいといっている　ルカ７：33-34）
「囲い」というのは教会のたとえとして読むこともできます。先日ある集会にでていたら身を寄せる教会がないことを嘆いている方がいました。「囲い」＝教会にいっても居心地が悪いと訴えていました。それに対して教会でみんなとお昼を食べればいいよとアドバイスする人もいました。そうすればお互いよく知ることができるからというのです。嘆いた方はそれを聴いてう

つむいていました。わたしもため息をつくばかりでした。
あるときイエスは 99 匹の羊をほおっておいても 1 匹の羊を探しにいく（マタイ 18：12、ルカ１５：４）とたとえをお話になりました。この励ましは嘆く人には届かなかったのでしょうか。いえ、届いているはずですが、いまそれを実感できないのでしょう。セカンドチャーチは 1 匹の羊が集える教会を目指していますが、なかなか実現できません。できているのかもしれませんが、見える教会ではなく、ある意味でセカンドチャーチは見えない教会なので実態がわたしにもわかりません。
ただつよく戒めなければならないのは、ただお一人のまことの羊飼いであるイエスの導きに従うこと「わたしは羊の門である」と宣言されるイエスさまに信頼することです。そして、そのように自分がこころから願っているかとたえず問い続けることです。